

# 在宅の重症心身障害児

# 保護者 介護疲れ深刻

## 県内、短期入所先が不足

わが子と暮らしたい。その願いながら、医療的ケアが必要な重症心身障害児と在宅生活を続ける県内の保護者が休息なく介護に拘束され、心身ともに消耗し心を病んでしまつほどの厳しい現実に向面している。休息支援となるショートステイ（短期入所）の受け入れ施設は、障害がより重度であれば極端に少なく、空白地帯の県央部を中心に地域による支援に格差がある。

## 「休息ほしい」支援切望

宮崎市に住む母親(37)は昨年6月、重度脳性まひの長男(8)を支援学校から連れ帰る際、ひどいめまいに襲われた。その後、車を運転中に急に体が震えだし、アクセルが踏めなくなった。医師はパニック障害、うつ病と診断。母親自身の心身の疲労の蓄積が原因にあった。

長男は口や鼻から定期的にたんを吸引、鼻から腸までチューブを通し流動食を持続的に注入しなければならない。夜間は介護で熟睡できないまま。支援学校では、こうした医療的行為の対応が難しいため別室で待機を強いられる。

休息になるはずのショートステイも、より重度の障害児に常時対応できるのは県内で愛泉会日南病院(日南市)と

国立病院機構宮崎病院(川南町)だけ。しかも、重度障害児は看護員守りがより必要のため受け入れは1人に限定され、利用できない場合もある。預けても長男の体調変化を気遣い車で送り届けるため負担は大きい。

うつ病発症から長男は通学を中断。支援学校の協力で教諭の訪問教育を受けているが、「心穏やかに家族が寄り添えるためには休息がほしい。近くに受け入れてくれるショートステイ施設があるだけでいい」と母親は訴えている。

県障害福祉課によると、県内の重症心身障害児は成人も合わせて655人(2013年3月現在)。そのうち6割の406人は在宅生活だ。施設入所から地域生活へ施策が

移行する中、訪問看護や日中一時的に預かる支援は拡充してきたが、負担軽減は限定的。保護者が望むショートステイ支援は遅れてきた。

同課は「(施設の)小児科医、看護師不足が問題の背景にある。できる支援を少しずつでも広げていくしかない」と理解を求める。

別の人工呼吸器を使用している重度障害児の長女(11)の母親(45)は「自らの両親の手さえ借りられない家庭もある。急な用事に子供を置いて動けず、親の死に目にも立ち会えないかもしれない」と福祉サービス充実を求める。

## 来秋「霧島」で開催

来秋の「第6回日本ジオパーク全国大会」が本県と鹿児島県にまたがる霧島山系周辺の「霧島ジオパーク」エリアで開かれることが29日、決まった。東京で開かれた日本ジオパークネットワークの理事会で選ばれた。

致に向けたアピールを行い、理事8人による投票の結果、霧島が最多の5票を獲得した。全国大会は各地のジオパーク関係者や専門家ら約千人が一堂に集まり、講演やフォーラム、分科会、ジオツアーなどのイベントを通じて、ジオパークの在り方などについて議論や見識を深める。来年10月ごろに開催される見通し。

開催決定を受けて同協議会副会長の池田宜永・都城は「全国の人々に霧島ジオパークの素晴らしさを体感してもらいたい」と、環霧島地域行政、民間が一体となって取り組みを進めていきたいとコメントした。

理事会では開催立候補地による公開プレゼンテーションを実施。「霧島」のほか伊豆半島(静岡県)、白山手取川(石川県)、男鹿半島・大瀧(秋田県)の4地域が大会誘

都城市など本県や鹿児島県

【申し込み】郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、年会費を添え、現金書留で〒880-0185 70(住所不要)、宮崎日日新聞社広告局企画開発部「グレイス」係へ。



林真理子さん



美のカリスマKKOさん



放身縛の最響によるものと困... 初美(56)さん夫婦が譲り受け...

